法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

法政大学地理学会50年のあゆみ

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY
(巻 / Volume)
33
(開始ページ / Start Page)
26
(終了ページ / End Page)
42
(発行年 / Year)
2002-03-01

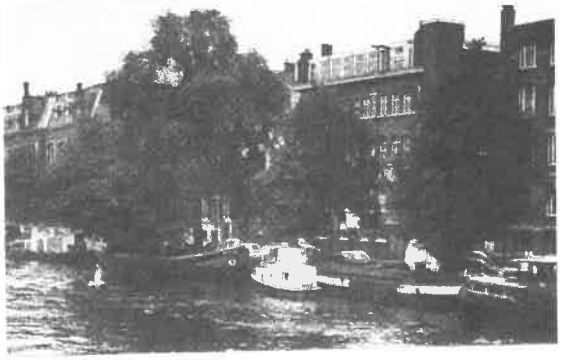
法政大学地理学会50年のあゆみ

法政大学地理学会は1950年3月に創立された。2000年には学会創立50周年を迎えて，11月11日に「法政大学地理学会創立50周年記念大会」が法政大学富士見キャンパスにおいて開催された。当日は澤口宏氏による記念講演，相原正義氏，漆原和子氏による特別研究報告，等の行事が催された。

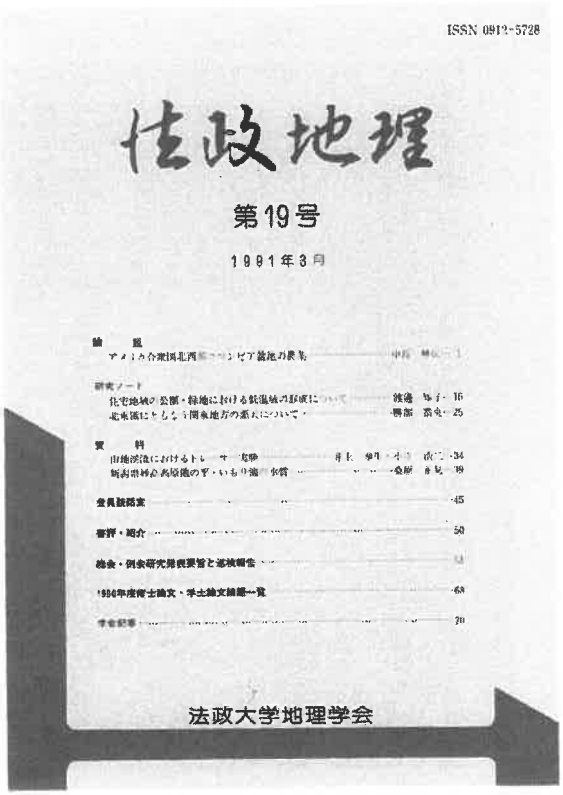
ここに50年間の「法政地理」誌に掲載された全論文の一覧と，「法政地理」誌の創刊号，および表紙の装丁が変わった各号の表紙，記念の写真を掲載した。また創立50周年記念に寄せられた会員諸氏の一文を掲載して，創立50周年を記念する特集とした。

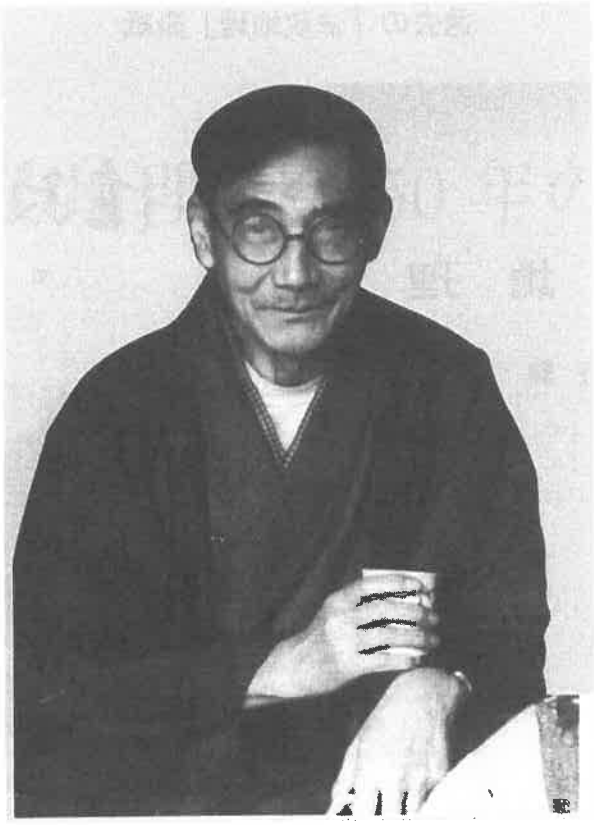
過去の「法政地理」表紙

法 政 地 理
第 1 號
法政大學地理學會


法政地理
第 8 号
1967年 月
法政大学地理学会
法政大学文学部地理学教室内

法政地理
第14号
1986年3月
法政大学地理学会
法政大学文学部地理学教室内


ISSN 0912-5728
法政地理
第19号
1991年3月
法政大学地理学会



初代会長　田中舘秀三先生

1950年　法政大学地理学会設立に尽力した1期生

1954年　卒業生

1959年　卒業生

1984 年　活動再開にあたっての岡山俊雄先生講演会

1984 年　同懇親会

1987 年　地理学科創立 50 周年記念行事

1990 年　夏　巡検

1995年　大会　懇親会

1996年　青木千枝子会員葬儀

2000 年夏　最上川巡検

2001 年春　利根川巡検

「法政地理」文献目録（1号～32号）

1号　研究
三井嘉都夫　遠州菊川流域の地下水
青柳甲子男　御勅使川扇状地の聚落に就いて
小池七郎　伊豆新島地誌
石川雄道　青森県「五所川原」の読図
九鬼将憲　宮崎県富島町附近の読図

2号　研究
大和裕子　三浦半島南部の漁業
松島一夫　東京湾上に於ける養殖地域の海面積所有形態について―北海区の本場海苔を主として―
桑山健司　肥前江ノ島の生態
短報
布施　茂　久我山附近の水について
大澤　全　世田谷区北西部の都市化

3号　研究
三井嘉都夫　多摩川下流域における河床変化と農業水利問題
長野　覚　門前町の歴史地理学的研究―福岡県英彦山について―
坂下利克　阿武隈國有林地帯における山村経済の実態
松井英子　長岡市の工業について
原田之幹　雪蝕によるルンドヘツカー―谷川岳附近における観察―

4号　研究
市瀬由自　多摩川流域の地形に関する若干の考察
大柴寿美枝　深川の木場について
中村宗敏　茨城県鹿島台地北部における農業の経済地理学的一考察
大和英成　東北地方の山村における農業
長井善達　沖縄糸満漁業に関する人文地理学的研究
三井嘉都夫　荒川の感潮状況について
島村勇二　那須扇状地の開拓村
大和裕子　東京湾における海苔養殖地域の労働力について

5号　研究
林　竹継　千葉県安房郡白浜町における漁業構造の研究
今朝洞重美　東京における繁華街の都市地理学的考察
石川雄造　秋田県鹿角盆地の農業地理学的研究
島田侑男　陸田の経済地理学的研究
浅野　勝　大分県佐賀ノ関半島岬端部の漁業
大和裕子　有明海における海苔養殖地域
池内長良　伊予の條里制
大和英成　新潟県亀田郷における水利秩序の変更に伴う農業の変貌（概報）

6号　研究
竹村　清　扇状地の地下水―松本市周辺の場合―
林　竹継　伊豆田子の漁業
島田侑男　都市化の指標に関する一考察
川上　誠　北関東の畑作農業―筑波郡豊里町を中心にして―
蛭田容之　埋立と漁業―東京湾岸における埋立とその補償に関する若干の考察
国司吾郎　多摩川における砂利採取業の沿革と地理学的問題
戸谷康義　現地研究成果

7号　論説
吉行瑞子　富士山における小哺乳類の地域社会の構造と植物社会の関係について
湯川宣雄　大阪湾沿岸各地に於ける高潮の実態
山口源吾　岐北山地増富村の人文地誌的研究

8号　論説
馬場孝治　手袋工業における地方産業の問題点
淵上三雄　五島列島若松町におけるハマチ養殖漁業
平野達雄　江戸・東京の発達過程における都市計画

9号　論説
小川　徹　まず「現象」に徹しよう
渡辺一夫　新潟地震　新たな都市災害
市瀬由自　庄川上流域の地形に関する若干の考察
上田茂春　荒船旧火山の侵食について
東郷正美　安曇川中・下流域の地形発達史
塩田　修　六甲山地における災害の考察

10号　論文
鴨澤　巌　社会科学としての地理学
白石光男　自然と人間との本質的解明を中心として
大貫　峻　最近における農学の地域分化
清水　湘　静岡県の柑橘
高倉　裕　地形学の現代的課題
市瀬由自　沖積世の地殻変動
漆原和子　夕張川流域の地形発達史
龍山良吉　屏風ケ浦の海食について
仲川信一　音羽泥炭層を観て

11号　論文
小川　徹　沖縄調査十年の雑感
飯塚広行　火山泥流地形―大野盆地塚原野泥流丘陵の微地形学的研究―
平野真佐子　白馬山麓の農業―白馬村の民宿兼業―
北条欣吾　青木ケ原丸尾における溶岩洞穴の特質について
前田ひろみ　甲府盆地における桃作農業の―展開
久川玄二郎　庄川扇状地の地下水賦存状態について

12号　論文
鴨澤　巌　埼北近郊山村の過疎問題
土田邦男　砂丘地における地下水
梅沢　勲　戦後における養豚業の発達と企業的経営
三浦弘志　漁業から見た波崎町
杉山　豪　青森県八戸港における漁業の現況と今後の問題点

13号　論説
山口不二雄　福島横編メリヤス産地の構造
長沢利明　台湾アミ族の社会変化―居住規制の変容をめぐって
研究ノート
山川克己　木曽谷南部阿寺川流域における岩塊堆積物について
浜田弘明　相模原台地北部における水車の分布とその利用
箸本健二　遠州鉄道の分析―鉄道旅客の変動にみる浜松都市圏の地域構造変化

14号　記念講演
鴨澤　巌　空間消費論―人文地理学統一のパラダイムとして―

論説
佐藤典人・池田一　出雲平野における屋敷林分布の偏在とその意味について
山口伸弥　段丘開析谷における谷の発達過程—利根川水系片品川上流部を例として—
相原正義　地理教育の今日的課題—官の動きを民の立場から考える—
研究ノート
八久保厚志　明治期における熊本県酒遺業の展開—近代酒造業の基本的性格に関連して—

15号　記念講演
三井嘉都夫　本邦主要河川の水質汚濁（最悪化期）の性格
論説
中俣均　沖縄・多良間島の村落空間とその構成原理
石井逸郎　離島における経済と社会—小笠原諸島・父島の社会構造—
岩井純　神奈川県津久井町の製紐業
研究ノート
竹植裕子　多摩川水系秋川に流入する渓流の水文特性と渓床勾配の関係

16号　記念講演
中野尊正　地理学の社会的役割り
論説
市瀬由自　北海道オホーツク海沿岸地域における洪水
関えり子　千葉県北総における野菜行商
研究ノート
藤本佳司　結城紬生産地域の構造分析
渡辺拓治　東京都における大気安定度と窒素酸化物濃度との関係
大洲盆地の気候研究グループ　愛媛・大洲盆地における気温の分布

17号　論説
川上誠　静岡・韮山町のいちご栽培の進展と小規模借地の展開及び支払小作料について
川内眷三　泉北ニュータウン造成にともなう潅漑用溜池の潰廃とその保全
研究ノート
佐瀬淳一　台風通過時における1時間毎の降水分布について

18号　記念講演
渡辺一夫　岩手県田老町—防浪堤構築による防災集落の建設をめぐって
論説
長沢利明　戦後期における台湾省ブヌン族の社会変化
吉本健一　隔週定時制高校にみる泉州の紡績業
佐藤典人・中山孝之・清水一哉・松本隆尚　モデル的な造成住宅地におけるヒートアイランドの実態
研究ノート
井上奉生・桑原正見　日本海側北部の山間流域における積雪中の溶存成分について

19号　論説
中島峰広　アメリカ合衆国北西部コロンビア盆地の農業
研究ノート
渡邉知子　住宅地域の公園・緑地における低温域の形成について
勝部恭央　北東風にともなう関東地方の悪天について

20号　論説
市瀬由自　水準測量成果に表現された平野の地殻変動
東郷正美　オーストラリア、ビクトリア州域における第四紀断層運動
佐藤典人・中村邦彦・小野里恭子　八王子市の夜間気温に関する一考察
川内眷三　泉佐野市・樫井川流域の溜池環境と水利転用について
研究ノート
渡邉明　斜め写真による海面現象の観測方法について
島村勇二　多摩川の自然史と人為的自然史

21号　記念講演
大矢雅彦　海外援助における地理学の貢献—ジャムナ川（バングラディシュ）架橋計画を中心として
論説
川上誠　伊豆天城の山葵業における「山葵仲間」について
佐瀬淳一　九州地方に発生する台風時の地形性レインバンドについて
研究ノート
樋口將貴　地上気圧配置型と降雪発現域からみた関東地方の降雪分布について
総説
田淵洋　フィンランドにおける気温の逆転現象にかかわる諸問題

22号　論説
浜田弘明　近郊都市の博物館における地理的課題—現代的視点に立った博物館活動に向けて

23号　記念講演
長野覚　日本人の山岳信仰と自然保護
論説
細田浩　都市における社寺林の地生態学的研究—大宮氷川神社叢を例として
浜田弘明　近郊都市の台地部住宅地における地名—相模原市・座間市を事例として—
研究ノート
長沢利明　台湾南勢アミ族の儀礼体系
中山大地　地形学における数値地図の利用について
斉藤潔　立地紛争と地域政策に関する政治地理的考察—スウェーデンの放射性廃棄物管理を事例に—
千葉晃　小規模緑地とその周辺における気温観測

24号　記念講演
浅井辰郎　アイスランドの今昔—気候と人口小論
論説
三冨正隆　台湾蘭嶼ヤミ族社会の民俗方位と地名
八久保厚志　球磨焼酎産地の形成と市場変化—近在型工業の成長と存立基盤変化—
箸本健二　流通情報化に伴う空間的影響と地理学の研究課題
研究ノート
中村圭三　北海道における1993年夏の異常低温と1994年夏の異常高温の生物季節におよぼす影響について
橋本達也・中西淳　野球場および陸上競技場における風の分布

25号　記念講演
吉川虎雄　地球の温暖化と海面の上昇
論説
佐藤典人・木村成彦・亀井　尊　盆状地形における気温分布と斜面下降風との対応
中村圭三・高山晴光　地球環境問題に関する大学・短大・看護学生の意識構造について
大平一成　陸地と海水面の温度差からみた海陸風の吹送について

26号　記念講演
森本良平　地震学の周辺にて（私と地理学の50年）
論説
島村勇二　プレジャーボートの普及をめぐる河川管理と環境整備に関する日・英の事例研究
井上奉生　山間地域の人造湖における水温特性および濁度からみた密度流について
新川幹郎・小寺浩二・小林信彦　武蔵野台地白子川上流域の水温と地温の特性について

27号　記念講演
吉野正敏　中国北西部のタクラマカン沙漠における沙漠化の研究
論説
川上　誠　天城山葵における「荷礼焼印」（「荷礼焼印」出荷体制）の問題
研究ノート
三瓶達成・小寺浩二・新川幹郎　湯の湖の湖水の性質について
伊藤あゆみ　地形の異なる空港のガスト発生について

28号　記念講演
池内長良　享保飢饉と稲虫
論説
八久保厚志　焼酎産地の形成と企業行動
研究ノート
高塚まどか　日本列島における菜種梅雨現象について
原　昭宏・矢土秀樹　中国地方における水面積
松井正樹　富士山南麓今泉湧水群における湧き水調査

29号　最終講義
市瀬由自　地理学と私―山地と平野をめぐる二、三の視点―
論説
佐藤典人　ニュージーランドにおけるぶどうの栽培地域とその気候環境
中山大地　DEMからシミュレートした流路網と手作業により抽出した流路網の対比
小山伸樹　行政地域の細分化・分散化と住民参加に関する研究―「中野方式」の評価を通して―

30号　記念講演
式　正英　人為の関わる峡谷の形成―地形地理学的視点からの考察―
研究ノート
加藤美雄　夜間における気象情報等のニーズの特徴について
小林信彦・小寺浩二・吉野徳康・加藤美雄　武蔵野台地白子川上流域の浅層地下水の水位・水質変動特性
小盆地の冷気湖形成時における湖の熱影響について―長野県野尻湖を例として―

31号　特集
浜田弘明　地域における地理学の役割―特集にあたって―
佐川和裕　博物館・資料館と地理学―学芸員の立場から―
相原正義　博物館友の会の活動と地理
戸崎憲一　埋蔵文化財行政と地理学―その現場における現状と課題―
佐藤照子　自治体史と自然的基盤の地理的・歴史的把握について―「村史　千代川村生活史　自然環境編」を事例として―
研究ノート
柴田伊冊　調布飛行場の整備計画について―都市型飛行場としての発展の可能性に関する評価―

32号　記念講演
鈴木理生　江戸から東京へ―その地理の歴史的変遷―
特集
細田　浩　「世界の地理教育」に関する二つの視点―特集にあたって―
佐藤典人　ニュージーランドの自然の素顔
柴田　健　マレーシアの地理教育
梅本　亨　地理教育の題材としての北極圏ノルウェー
長谷川裕彦　両極地域を題材とした地理教育

創立50周年に寄せて

法政大学地理学会創立50周年を迎えて

会長　三井嘉都夫

法政大学地理学会は1950年3月誕生した。2000年を迎えた20世紀最後の年50周年となる。法政大学は今や躍進の途上にあり，ボアソナードタワー（地上27階，地下4階）の完成，新4学部（国際文化，人間環境，現代福祉，情報科学）が誕生し，入学希望者の激増という状況で，去る9月30日には新高輪プリンスホテルに於て創立120周年の式典も盛大に行われた。

法政大学の歩みに比較すると法政大学地理学会は未だ半分の域に達してはいないが，地理学会は1937年高等師範部歴史地理学科として誕生しているので今年で63年となる。すでに1987年には史学科，地理学科創立50周年記念大会も実施された。なお，高等師範部以後，1947年には旧制文学部に地理学科が誕生（1950年月第1回生卒，1951年第2回生卒で終る）したが，1949年には新制大学に移行し，制度の大変革があり，高師部から新制に編入した学生は1951年3月新制第1回生として卒業（2000年3月卒業生は50回生となる）された。

ところで高等師範部時代，歴史・地理学科となっていた当時，年報「法政大学地歴研究」第一輯が，－紀元二千六百年記念－として1941年5月刊行された。これはかなり充実したものであった。ただ，第二次世界大戦に突入し，物資不足の折柄第2号以後は出版されなかった。1950年，時の地理学科主任教授は田中館秀三教授であった。旧制1回，2回生，新制第1回生らの肝入りと諸先生方の指導の下で設立した法政大学地理学会は，初代田中館秀三会長，多田文男，新井浩副会長，浅井辰郎先生を顧問にいただき，学生が幹事役をおおせつかった。この時の田中館先生の言葉が生きている。既に法政地理13号（1985年3月刊）にも書かせていただいたが，先生曰く，「此の会は生れ出づべくして生れ，然もその生命は永久的であり，会員の努力の続かん限り進展する。此処に本会の誕生を会員と共に喜び，旦創設委員の労を謝する」とあり，なお続く言葉に，「此の会は学会である限り真摯なる研究は会の本旨であることを忘れてはならぬ。如何なる問題の研究にあってもその中に精神のこもったものは真理を必ず見出しうる。それ故会員は科学的良心をもって真理への追求をおろかにしてはならない」と。以後法政大学地理学会は，地理学教室を中心として会員相互の親睦をはかるとともに，会誌の発行，総会，研究発表会，巡検等を行って来た。

ただ，学会誌は，12号までは順調であったが1960年代後半から70年代に亘る学園紛争にまき込まれ，中断の止むなきに至った。1985年ようやく学会活動の復興を計る声が高まり，学会誌は1985年3月，13号が出版された。以後会の運営は順調に進み，毎年4月の総会，特別講演，研究発表，例会，巡検等が滞りなく行われている。

1997年からは学会誌も年2回出版され，2000年に当る今年度は50周年記念号として33号が刊行される。ここに初代会長田中館秀三先生の精神に沿うべく，後を担う者共に頑張ろう。

法政地理学会50周年に思う

大和裕子

法政地理学会は昭和25年に設立され，途中その活動が中断された時代があったようですが，本年（平成12年）創立50周年の記念行事が開催されたことは，誠に意義深く，歴史の重みを考えさせられました。

例年，春に開催される地理学会に参加したり，送付されてくる「法政地理」「法政大学地理学会ニュース」を拝見し，地理学会が先生方のお力添えの下で，委員会や学生会員によって着実に運営されている様子を伺い知ることができ，感謝しております。

それにつけても，初代会長の田中館秀三先生が

「法政地理」第1巻に述べられていた学会に対する思いとして，『(学会）の生命は永久的であり，会員の努力が続く限り進展する』と強調されていたことを思い出します。

法政地理学会の設立については，昭和25年前後，当時は夜間部の授業が終わった後で，第1回目の卒業生と在校生の代表の集会がありました。昔の事なので話し合いの内容は定かではありませんが，それぞれ激しい意見の交換があり，私は，その雰囲気に圧倒されたことが印象として今でも残っています。地理学会としての研究，地理教育の研究，会員相互の親睦を目的とする学会の組織・運営・活動の具体化についての議論百出であったと思います。田中舘先生がご存命ならば，今日の50周年記念行事を迎えるに当たって，どんなにおよろこびなさるのかと想像しました。

地理学会創立当時の時代相と現在とは，その変貌も激しく，急速な勢いで流れていきます。地理学を専攻する人々と，それを受け入れる社会の事情も，学会創立当初と，現在では，かなり事情が変化しているのではないでしょうか。

その意味から考えて見ると，地理学会創立の時代には，地理学を学び，地理学の研究者を目指したり，教育界での地理教育にたずさわろうと希望する人々が多かったように思います。勿論，当時は，夜間部での学業研鑽ではあっても，昼間は，すでに他の社会での職業に従事していた人々もいました。

しかし，田中舘先生の学会に対する期待として，会員は科学的良心によって真理への追求をおろそかにしてはならないと述べられています。

法政地理学会設立50周年を迎えた今日，初心にかえって，卒業生の一般会員と，学生会員が，法政地理学会の総会や懇親会に参加し，会を盛り上げることが第一であると考えます。

1950年のころ

岡永亮八郎

本大学の創立は1950年である。発会総会に出席しているはずであるが，その様子がどうだったか思い出せない。

ご存知の通り法政大学地理学科の母胎は，旧制高等師範部歴史地理科である。当時，歴史地理科の研究誌が出されていたが，今日の学会ニュースのレポートを多少充実した程度のものだった。地理学に関するものが多かったのだが，西洋史や日本史の研究ノートもありバラエティーに富んでいた。ちなみに私が投稿したのは，美術史の鍋島教授のご指導を受け，奈良・京都の古美術行脚のレポートであった。また，卒業論文準備の調査で取材した民俗学の小論であった。卒業論文といえば，他大学の専門部では，必ずしも卒業の条件としていなかった。法政大では卒論に力を入れていた。ここに法政の特色があり，卒業してからの研究にどんなに役立ったことか。

1950年という年は，その前後に戦後の教育改革があり，旧制の高等師範部および学部が廃されることになっていた。それに併行して新制大学文学部地理学科が発足する。その頃，大学の先生方にはすでに大学院創設構想が視野に入っていたかも知れない。このように法政大学地理学科が独立し，正に大きく飛躍しようとする時に法政大学地理学会が発足した意義は大きかった。

学会創立の経緯については三井嘉都夫先生がくわしい。多田文男先生の肝煎りで，三井先生が実務を担われたものと記憶している。私は高等師範部を卒業してから，福島県立高校に4年程出ていたのであるが，大学院が開設したのを聞き，大学院に入学すべく，学部編入をした。その頃，学生として活躍していたのが，中村宗敏，青木千枝子，清水靖夫，桑原正見の諸氏であった。地理学会もようやく軌道に乗り振やかになっていた。彼等は他の大学の学会とも交流し，法政地理の存在を高めた。また，その頃から日本地理学会の学術大会で発表する者も多くなっていった。しかし，学会運営は学生が中心であり，多くの先輩がリードするところまでいっていなかった。

その後，地理学会は1960年代の大学紛争の波を乗り越えて，再開し今日に至ったのであるが，再開にあたり，規約を改め，組織をかため，文字通り学術的な地理学会として出発したのである。

今や法政大学地理学科および大学院は充実し，多くの逸材を世に送り出している。大学地理学教室と法政大学地理学会が，車の両輪となって，益々発展することを願ってやまない。

地域住民と共に事実（古文書・記録）を掘り起こし書き留め置く

川上　誠

二人の先生の言葉が忘れられない。「靴のかかとをすりへらし（「足で調査しなさい」），地元の人から嫌がられるようになったら調査はよいところまでいっている」（多田文男先生）。「略奪調査」（鴨澤巌先生）。地理の調査（特に人文）は地元の人に多くの時間をさいてもらって，いろいろ話を聞き，また資料をいただき，多くの好意にすがりながら，地元へは何一つ還元していないではないか。

若い時から今日まで，常に心にひっかかってきた言葉である。実のところ，山葵の村々の調査には10回以上訪ねた家が何軒もある。個人の蔵の中や公会堂の物入れを調べたり，どれほど迷惑をかけたか知れない。残念ながらまだ嫌われてはいないが，どれほど時間を無駄にさせたか，いやな思いをさせたか計り知れない。還元は何ひとつ行っていない。

過日，地元の永年の知り合いにこのような話をし，私の得た資料，今後の調査資料と住民の把握している事実（記録・古文書など）を小冊子として連続的に書き残していけば，地域の歴史，郷土の見方，理解も深まるのではなかろうかと話した。彼はおおいに賛同し，私がワープロを打ちましょうと言ってくれた。急遽，趣意書入りの小冊子の見本をもち，調査の合間に賛同を呼びかけた。会えた人は皆賛成していただいた。なかには原稿を書くという人が2名も出た。

そこで見切り発車をした。資金的裏付けは全くない。コピーをとじただけの冊子で，コピー代だけ頂戴というもので，会則（規則）・会費なし，入退会自由，投稿大歓迎等々である。

1, 冊子の表紙

二〇〇一年六月
山葵歴史資料(一)
山葵歴史の会

2, 内容のあらまし（項目）

(1)　山葵に関する今年最大の発見
　明日香で発見された木簡にワサビの文字（新聞記事）の解説
(2)　若衆沢……古文書・記録の紹介
(3)　天保の凶作…中伊豆町筏場の坪刈
　古文書の内容紹介・解説
(4)　隠居沢（おばあちゃんの沢）の紹介
(5)　各地のわさび(1)
　(イ)　江川太郎左衛門と山葵
　「竹垣直清日記」（新人物往来社）と「江川担庵」（吉川弘文館）にみられる山葵

「略奪調査」の還元としては心もとないが，これを続け，内容を充実していくことが，地元へのせめてものお返しと思っている。ある人は「本当は自分たちがやることだが」と言った。私には判っている。ムラ社会では，新しく事を起こすことは容易ではない。せめて，そのきっかけ作りになればと思っている。

近況報告

島村勇二

この夏，念願だったポツダムを訪問，対日政策を決定した歴史的会談の部屋に立った。2001．07．20である。原爆投下の決定，230万人の戦争犠牲者を生んだ自滅戦争，改めて不戦を誓い，平和・民主憲法の重さと学校教育の原点を再確認した。

軍国少年は海軍志願・敗戦，教職を求め，法政の高等師範，学部，大学院で昼は学校現場，夜は法政で高名な先生と良き学友を得，学校現場と教え子に恵まれ，今は小・幼教員の養成と，大学通信教育学生への指導と現職教員の再教育に努めて

いる。一方，国土交通省・京浜・江戸川土木工事事務所，河川環境管理財団等で河川係留問題や，「川に学ぶ社会」の推進策について提言している。これらについては，勤務している大学で「自ら学び自ら考える，学び方，調べ方」の指導内容・方法・評価論として学生に講義をしているので，後日機会を得られれば，ご指導・ご助言を賜れれば誠に幸いと考える。

学校五日制を迎え，地域に根づく教育改革や総合的な時間は，地理学専攻の学校現職者は出番とし，一層の活躍と，法政地理学会は，その支援を企画・実施を願いたい。特に「興味・関心・意欲」という観点に立つ，「新学力観」による学校教育の充実と発展のために，我が法政地理学会・会員の方々の奮起を望むとともに，私も微力を尽くしている。

法政大学地理学会50周年によせて

清水靖夫

法政大学地理学会が誕生して50年，折しも世間はミレニアム，新世紀と書き立てている。ローマ法王庁ではこの一千年を振り返っての反省・評価が行われたという。われわれの生活実感とは大分かけはなれているようにも感じられるが，どうも目先の事，場当たり的なことであたふたしている者にとっては，考えさせられるスパンである。一千年というオーダーからは比較にならないが，わが国の戦後の二分の一世紀は，生活をしてきた者にとっては大変な時代であった。そのうち，学生として，また教員として学友や先輩諸氏，恩師の方々と，多くの時間をここで過ごさせて頂いたというのは，有難いことであった。

法政大学地理学会との関わりは，実は入学以前にさかのぼる。未だ高校生であった1949年か1950年のこと，中学での恩師で本学の卒業生である大澤詮先生が，「偉い先生の指導で銚子に巡検に行くからついてこい」ということで参加させて頂いた。ご指導は多田文男先生であった。一番後ろから恐る恐るついていき，帰りがけに多田先生のご友人とかの紹介でサンマを土産に帰ったことがあった。多くの先輩や先生方とご一緒であったことは後から知った。

入学後の印象的な巡検は，渡辺光先生指導で，折しも来襲した台風の中を伊豆下田への旅行であった。陸に引き上げられた船の中をバスで行くという極めて希な体験をしたもので，今なら即中止であろう。

三井先生の指導での赤間沼への巡検は，渡良瀬川の足尾鉱毒問題，利根川の流路の変遷や遊水池，谷中村跡など見学の後，電柱を積んだトラックがすれちがいざまに，水田に転倒したのは，スローモーションカメラの映像のようで，何とも印象的であった。

巡検ばかりではなく，研究発表や他学の地理学科の学生たちとの交流も，私たちの背後にはつねに地理学教室と地理学会があり，安心して動き回っていた。

世間は落ち着き，地理学科も二部から一部へと変わり，学生数も増加し，優秀な人材が輩出され，地理学会も盛会を迎えるが，やがて本学も，紛争の時代に否応なく突入。授業ができず，勿論学会活動も自然消滅のような状況を呈するようになる。

授業再開後，三井，市瀬両先生をはじめ，教室の諸先生が中心となって地理学会再起復活に努力され，大きな盛り上がりが生まれ，地理学会創立50年と続く中で一つの時代を作り上げた。

時代は，低成長の時代であるという。時代に同調することもないし翻弄されることもない。今こそ，地に足を着け，一歩一歩進むのが将に地理そのものであろう。

どうも思い出ばかりを書いてしまったようである。次の50年の実り多いことを願って止まない。

印象に残った先生方と法政大学地理学会

細田　浩

1970年に筆者が法政大学を卒業する際，当時卒業論文を指導していただいた吉野正敏先生から「卒論をまとめて『法政地理』に投稿するよう

に」とご指導いただいた。思えばこれが私の論文（とは言い難いが）が活字になった最初であり，法政大学地理学会との出会いであった。先年別な目的で過去の「法政地理」を閲覧していて，第11号に自分の書いたものを発見したが，恥ずかしくて読むに耐えなかった。吉野先生は，「モノを書くということは，恥をかくという覚悟で1マイルずつの道標を積み重ねてゆくように」とご指導くださったが，私はあまり道標を積まぬまま年だけが過ぎてきた。

教員となって何年か経ってから（昼間自由な時間がとれたので）別な大学の大学院に行き，そこで法政大学地理学会の活動を知った。そのころは自分が法政大学地理学会の活動に協力できるなどとは予想もしていなかったが，母校の地理学会が活発に活動しているのを部外から知るのは心強かった。学部の時に同期であった佐藤典人先生にお声を掛けていただき，その後集会委員や編集委員のお仕事をさせていただいた。

集会委員は大会や例会のほか，巡検の計画，実施がおもな仕事である。私の在任中で印象に残っているのは北海道や奈良での巡検である。北海道では千歳川や札幌を案内していただき，たいそう興味深かった。このときは北海道支部の塩見一夫会長（当時）や，山田敦彦支部会長（現）ほか，多くの北海道支部関係者にお世話になった。また，奈良巡検の際には奈良女子大学の戸祭由美夫先生にご案内いただいた。特に歴史地理学的な古都のご案内で，大路の跡などを指し示されたことが印象に残っている。この折は，市瀬由自先生の古典的なフィールドワーク姿がなぜか目に焼き付いている。

編集委員の仕事を引き受けた年から，学会の方針が「本誌は年2回の発行」と決まり，正直なところ手に余る重荷であった。右も左もわからぬまま，加藤美雄君をはじめとする他の編集委員に助けられて何とか動き出したことを思い出す。

法政地理学会は卒業生の数が多く，通信教育部の卒業生などを加えるとかなり層が厚いものだな，との印象をもっている。巨像は身動きが鈍いが，そう簡単には倒れない。法政大学地理学会も若い学生諸君や関係者ら新しいメンバーの参画を促して，常に血液をリフレッシュしながら運営を活発化してゆく必要があるだろう。過去の伝統の上に新しいマイルストーンを積み上げていって欲しいと期待している。

法政大学地理学会の活動を振り返って

横山　勝

私は，通信教育部の学生で，なかなかレポート提出が進まない状況にありますが，何度か法政大学地理学会の巡検に参加させていただきましたので，ひとこと述べさせていただきます。

私のような学生は，地理学に興味はあるけれど，なかなか読書学習だけですと，本当に地理学に接する幅が狭くなってしまいがちです。自分の理解は本当に正しいのか，常に疑問とのたたかいでもありますし，生来の怠け癖もあって，なかなか学習がはかどらない現状があります。

ですから，通信教育部での現地研究は，実際に地理学を学んでいるという実感を味わうことができましたが，こちらは，何度も参加できる訳には参りません。

そうした中，地理学会の巡検は，大変良い機会だと思います。私は，これまで何度か巡検に参加し，楽しい時間を過ごしました。まだまだ地理学を勉強していると，胸をはって言える立場ではありませんが巡検に何度か参加させていただくうち，地理学的な思考を知り，あるいは，読んでみると良い本などを紹介いただくことができる等のメリットがあります。巡検に集まったメンバーの皆さんが，様々なお立場であることも多く，そのお話もとても楽しいものです。

何より，「百聞は一見にしかず」ではありませんが，現場で見ることは全く違います。

おそらく企画くださっている委員の皆様には，多大なご迷惑をお掛けしていると思うのですが，今後も良い企画があれば，ぜひ参加したいと考えております。どうぞ宜しくお願いします。

通教地理スクーリング・巡検回顧録

山田敦彦

法政大学地理学会創立50周年おめでとうございます。昨年の11月11日法政大学地理学会創立50周年記念大会ではご案内をいただき北海道支部の近況を発表する機会に恵まれ感謝している次第です。支部のことは地理ニュース等でご紹介させていただいていますので，今回は法政大学入学の動機はなんだっただろうかと言う点を自問自答しながら通教生活を回顧してみたいと思います。

日頃から公務員生活だけでは何かしらむなしさがあり，変化がなく，旧態依然としたなかに埋没し安定というところに安住していないか？そこで，取れる資格は何でも取ろうと試行錯誤のなか，まず資格を取るのは簡単ではないので資格取得の本より自分の好きなもの・興味のあるものからと考え，毎年1資格と順調に取っていましたが，段々難しい資格が残りいきづまっていました(取得した資格は造園士・衛生管理者・危険物のほか，簿記，珠算，剣道，運転免許などです)。

そこで測量士を取るためには，国家試験を受けるか又は大学に行き地理学を専攻し地図学などを取ることが必要なことが分かりました。国家試験は自信がないので通教でと考えました。職場に行きながら通教が可能かどうかも迷いました。決めるまでにはいろいろ各大学の案内資料・大学主催の説明会などにも参加し情報を得ましたが，最後にここしかないと法政大学地理学の通教を選考決断し，5月からレポートを出し添削指導を受けました。その年の8月に東京でのスクーリングにも出席しました。そのときに大学の事務にいろいろ卒業までの流れを相談したところ，まだ1科目も単位を取ってないのに2年で卒業は無理と強く言われました。その言葉が逆に励みとなり，2年で卒業する目標となったのです。それからは，添削を次々と提出し，地方での試験を毎回4科目は受け，さらにスクーリングは必ず毎回夏冬欠かさず参加しました。今振り返ると，そのときの事務員のおかげで卒業できたと言っても過言ではありません。人間考え方によっては悪くとると意地悪と流してしまい，良くとると喝が入り発奮したことによりプラス志向になることが出来ると言うことです。これを教訓に何でも物事は角度を変えて見ることが，場合によっては必要であることがわかりました。

話はかわりますが，通教での思い出の深いスクーリングでは鴨沢先生の授業の後，有志による鴨沢先生を囲んでの神楽坂での懇親会は先生と仲間の話を交わし有意義でした。また，巡検では三井先生の岳南地域における自然環境の変遷をテーマにバスをチャーターし29名の参加がありました。とりわけ，三井先生の江戸っ子風嘶家顔負けの話は我々をのめり込ませ，通教生を引き付けるものがありました。もう1つの巡検は当時，若手ホープとして活躍されていた佐藤先生の妙高高原の気候現象がテーマで，気温・風向風速測定だったと記憶しています。参加者は26名で現地集合でした。私ほか2名は千葉の熊谷さんの愛車ソワラで新潟に向いました。その夜から本番の気候の測定が始まり，斜面降下の実態を解明すべく風向風速・気温を山頂からすそ野までの間に2人ずつに分れ測定をしました。その時の印象は言葉では言い尽くせないほどに幻想的かつ感動的で，忍耐力のいるものでした。このこととともう一つは，10組ぐらいに分れペンライトで合図し合い励ましあったことでした。測定終了後の懇親会には名峯荘のご主人にも参加をお願いし，佐藤巡検に係るエピソードをいろいろと聞かせてもらいました。観測後，疲れた後の酒はまた格別でした。今は名峰荘もやめてしまわれたことを聞き，寂しいと思いつつ，ご主人様長い間大変ご苦労様でした。通教ではいろいろなことがありましたが，通教をとおして私自身やりたいことが出来（例えば霧の研究はまさに今も五里霧中です），人生の最大の宝である良き師・友を得られ，1986年北の大地での支部を発足しました。今年は苫小牧市での巡検を行い，東京から当会の編集委員の塩谷さんも参加されました。遠方よりご苦労さまでした。

最後になりますが，式典・今回の編集に携われた方々ほか，当会の発足以来携われた方々も誠にご苦労様でした。今後とも当学会が発展するとともに，もっと多くの支部ができることを期待して締めくくらせていただきます。